

江原政策部長解説

保健所機能低下でコロナ死増

維新政治の転換必要

保健所は医師・保健師・栄養士・臨床検査技師など様々な職種が多種多様な仕事をする専門家集団である。大阪ではその数が、2000年の61万所から2020年には18万所に減らされた(図1)。

コロナ禍で露呈した大阪の医療崩壊と保健所機能の麻痺は、感染症対策の基本を放棄してきた政治の責任と言わざるを得ない。

科学の軽視

疲弊する現場

大阪の感染症対策はもともと不十分だった上に、「出口戦略」の名で「大阪モデル」なる独自の基準を設けて、科学的な検証や現場の声に耳を傾けることなく、知事のトップダウンで進められてきた。その結果がコロナ

図1 大阪の保健所は20年で3分の1に

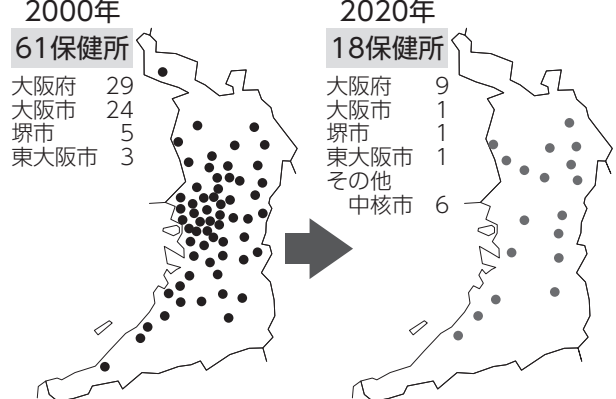
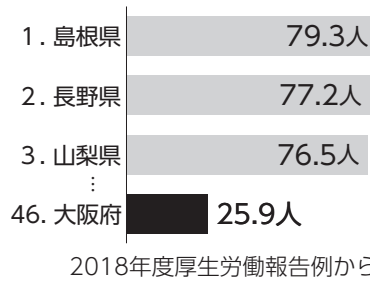


図2 人口10万人あたりの保健師数



2022年度 各地区総会のご案内

協会の各地区総会が順次開催される。開催日時、場所は次のとおり。

Table with columns for region, date, time, and venue. Includes regions like 東大阪・八尾・柏原, 北大阪, 北河内, etc.

3月度生涯研修抄録

知っておきたい抜歯時の偶発症とその対応について

雨河茂樹氏(市立池田病院歯科口腔外科主任部長)

歯科臨床で抜歯は最も基本的で高頻度な口腔外科処置ではないだろうか。しかし、乳歯や歯周炎の抜歯、難抜歯や埋伏歯の抜歯など目的や適応、難易度、年齢層は様々なで、口腔外科学をはじめと

とした歯学・医学に関する幅広い知識や高度な手術手技が要求される。また、抜歯は通常局所麻酔下の手術行為であり、肉体的な侵襲を伴う。残念ながら多くの患者にとって歓迎される治療ではなく、不安、恐怖、嫌悪といった精神的な苦痛が生じるため、時として全身的あるいは局所的な偶発症が生じることがある。現代の超高齢化社会においては、循環器疾患やがん、脳卒中、糖尿病、腎臓病などの合併症を有する患者が多い

ため、トラブルの発生頻度はより高まっている。歯科医師は偶発症に関する知識を日頃からアップデートし、明日からの臨床の一助となれば幸いである。(協会行事案内参照)

わが青春 つきるとも -伊藤千代子の生涯- 無料上映会のご案内. Includes QR code and promotional text.

表 2018年度入試の状況

Table showing exam results for 2018, including scores for male and female candidates across different categories.

別なき社会へ



【第3回】

差別の精神的苦痛 適正に評価・賠償を

医学部入試における女性差別対策弁護団 弁護士 中山純子

偶然では生じない 男女点数差

医学部入試において性別という属性による差別的取り扱いが発覚した経緯は、これまでの連載で紹介したとおりです。私は現在、4人の原告が聖マリアンナ医科大学に対して損害賠償請求を行っている訴訟を担当しています。

聖マリアンナ医科大学に設置された第三者委員会が2015年度から18年度入試の調査・分析を行ったところ、第2次試験受験者のうち91%から97%の受験者の志願票及び調査書の点数が、性別及び

「ケア労働」は女性 無自覚の共有. Text discussing the concept of care labor and its gendered nature.

第三者委員会のヒアリングでは、「子育てによる早退の穴をどのように埋めて患者に対応するのか」という問題がある。「女性医師が増える」と休職する医師が生じる可能性が高まる。「男性医師の方が激務に耐えることができる」という意見が少なくなかったと報告されています。男性であれば女性であれば、家事・育児・介護といった家庭生活におけるケア労働をする能力に差はありません。にもかかわらず、医師が女性の場合には、

子育てによる早退や休職の心配をしなければならないのは、「家事・育児・介護は女性の役割」という伝統的な性別役割分業の意識が無自覚に共有されているからだと思います。ケア労働をどのように分担するのは各家庭の個別問題であり、男性医師の方が長時間の激務に対応させやすい現実がある以上、入学者を確保する受験の段階で点数を操作し、大学が女性医師より男性医師を確保しようとしても「仕方がない」と思う方もいるかもしれません。しかし、血のじむような受験勉強のすえに、女性という理由だけで低く評価された受験生に、仕方がないよねとは言えません。この記事を読んでいる皆さんにも、かつて受験生だった経験があるかと思えます。その当時の自分が、「あなたの性別だと評価が低くなります」と言われたら、元受験生たちの憤りや悔しさは想像に難くありません。医学部入試差別の訴訟に参加した原告の方々は、自分と同じような思いを将来の受験生にさせたくないという願いをもって臨んでこられました。原告の方々の精神的苦痛が適正に評価されて賠償されること、そして大学が差別的取り扱いを自ら認め、差別的取り扱いの発生原因と再発防止の具体策を広く社会に説明することが重要です。加えて、社会の担い手である私たち一人ひとりが、性別に関わらず誰もがケア労働の担い手になることを前提に、これまでの性別役割分業の意識のもとで構築されてきた社会構造を意識的に変えようと努力することが、医学部入試で差別的取り扱いを受けた受験生たちの願いに込めることになるのではないかと思います。(つづ)